



Point of view

国際基督教大学学務副学長
教授

森本あんり

Morimoto Anri

「カントの先験的悟性概念、または、
あなたたつてほんど何見てるの？ について」

「あのピーターラビットのお皿がね」と、ある朝妻が話しかけてきた。どのお皿だかわからないけれど、とりあえず「うんうん」と話を合わせているうちに、妻が気づいて手を止める。「わからないの？ いつも使っているあのパン皿よ。」
「え？ どれ。」「これよこれ。毎朝使っているじゃないの。」

そう言われて見ると、たしかにお皿の真ん中に、例のきよとんとしたうさぎの絵が描いてある。「え？っこれピーターラビットだったの？」「何を言っているの、もう二〇年も使っているじゃない！」「そんなこと知らなかったよ。」「毎朝見ているのにわからないはずがないでしょ。」「でもさ、お皿についていつも何か上に載っているから、絵柄なんて見えないよ。」「食べ終わったら見えるでしょ。」「いや、パン屑とか残って

るし……。」

こうなるともうわたしは「しょうもない人」のパターンに入ってしまう。だいたい二〇年も使っているなんて、大きさだよ、とやんわり抗議してみると、いやあれは日本に帰ってきてすぐ買ったんだから、子どもがまだ小さかったし、大丸ピーコックでポイント貯めて、ほんとならもつと高かったのだけど千八百円で買ったんだから、などというものすごいディテールがすらすらと証拠に上がってくる。この時点で裁判官も陪審員も絶対に妻の方を信じるだろう。

そういうえば、と思いついたが、最近同じようなことが職場でもあった。ある会議に出席している時、秘書から急ぎのメモが回ってきた。その後休憩に入った時に、隣の女性

職員に言われたのである。「とてもかわいいメモ用紙ですね。」ええつ、何が？ 改めて見てみると、そのメモ用紙は薄翠の縁取りがしてあって、何だか太った猫のイラストまでついている。わたしはメモの内容は読んだが、その周りにあるものには一切気がつかなかった。いつもの連絡に使われていたのがそんな用紙だったかどうか、まったく覚えていなかったのである。

人間は、やっぱり頭でものを見ているのだ。視覚情報は目を入り口にしていくけれど、入ってきた情報を「見る」のは脳である。いやそんなことは現代の脳科学者なら誰でも知っている、と言われそうだが、こう立て続けに自分が「見ていない」と言われると、つくづく実感としてよくわかる。わたしは自分の見たいものだけを見ていて、興味のなものは存在すら認識していないのだ。ここで「そういうディテールは女性の方がよく見ている」などと口をすべらせてはいけない。家庭でも職場でも、袋だたきに遭うこと間違いないのである。

『46年目の光』(NTT出版)という本がある。三歳の時に失明して、四六歳で視力を取り戻した男の話。これが抜群に面白い。この人は、小さいときから視覚のない世界を縦横無尽に楽しんで生きてきた。自転車を乗り回し、スキーで疾走し、幸せな結婚をして妻や子どもたちと暮らしている。そんな彼がある日、手術で視力を取り戻すことができると、という可能性が開かれるのである。

が知っているものは、すべてまず感覚を通して与えられたものである。これは、近代英国の経験論者たちよりずっと以前に、中世の神学者トマス・アクィナスが言ったことである。と同時に、カントが分析したように、われわれの内には、受け取ったその感覚データを何らかの意味あるまとまりへと構成するための枠組みがあらかじめ備わっている。はたしてそれは先験的に与えられているかどうか。哲学者たちはそう問うてきた。この本の事例は、少なくともその能力が幼年期のごく短い間に発達するもので、成人になつてからそれを獲得するのは難しいことを示している。

彼には、視覚をもった人には必ず起きるさまざまな「錯視」の現象がまったく起きない。逆に、絵や写真は、奥行きのないただの平面にしか見えない。手の届く距離より遠くにあるものの「遠近」は、触覚ではわからないからだ。自分の周辺世界の広がりについては、超音波の反射を頼りに飛ぶコウモリのように、彼は耳からの知覚でマッピングしていたのである。視覚を通して得る情報は、彼には距離や凹凸のことを何も教えてくれないのだ。

いちばん面白かったのは、友人が彼に『ブレイボーイ』誌のグラビアを見せてくれた時のことである。三ページにわたる特大の折り込み写真に、彼は思わず目を奪われた。こりやすごい。信じられない。何が？ だって「この人、身体に折れ線が入ってる！」——おいおい、感動するどころが違っただろ、とついツッコミを入れたくなってしまう。

ふつうに視力を使つて生きている人なら、それはすばらしいニューズに違いない、と思うだろう。目が見えないということとは、何しろたいへんなハンデイなのだから。だが彼はそんなふうには思わないのである。手術にはそれなりのリスクがあり、成功するかどうかは五分五分で、成功しても長続きするかどうかわからないし、薬の副作用で癌になるかもしれない。そもそも、彼にとって見えないことはちつともマイナスではなかった。見えなくても何一つ不自由を感じなかった人生に、見えるようになることはいったいどんなプラスをもたらしてくれるのだろうか。

だが、ついに彼は決心する。何事も、やらないで終わるよりは、失敗に終わるとしてもやった方がいい、と信ずるタイプの人間だからだ。二度にわたる手術の後、包帯を取った時の衝撃はすさまじかった。ともかく、大量の光がどつと溢れ込んできて、彼の視神経を強襲する。しばらくすると、彼の目そのものは、衝撃に慣れていた。

ところが、いつまでたつても彼には「見える」ということがどういうことなのか、よくわからないのである。世界はただの色の洪水で、背景と人物との区別もつかず、歩いてくる人が男なのか女なのも見当がつかない。向こうで動いているのがフォークリフトなのか太った人間なのかわからない。自分の妻でさえ、手を握ったり声を聞いたりしないと見分けがつかないのだ。

“Nihil est in intellectu quod non prius in sensu.” われわれ

人間の思考を広やかに柔軟にしてくれるものは何か。それは、異質な他者との出会いである。近年は猫も杓子も大事もグローバル化が必要だと言われるが、外国に出かければそういう他者との出会いがある、と保証されているわけではない。海外旅行をしても、そんな出会いをまったく経験せずに、あらかじめ知っている絵はがきの風景を確認して帰ってくるだけの人もある。

だが、このような本を通して知る世界は、確実にわたしたちの常識知を揺さぶってくれる。ほとんどの人が当然だと思いついて入っていることの土台を、気持ちよくひっくり返してくれる。本を読むことは、外国どころじゃない、天地がひっくり返った宇宙へ出かけるくらいにスリリングな冒険なのである。自分の見ているものを、別の世界に住む人はどんなふうに見ているのか。人はそう尋ねることで自分の視点を相対化し、異なる考え方を尊重し、お互いの違いを何とかして橋渡ししようとする努力を始める。自分の言葉を相手のシステムの中に置き換えてみて、それがどんなふうに見えるかを考える。いわば異文化間の翻訳能力が高められるのである。そしてこれこそ、「人間を自由にする」リベラルアーツという知の基幹部分を構成する能力である。何よりも、そうやって得られる新鮮な驚きは、自分をちよつとだけ若返らせてくれる。人は学べるうちは若いのだ。さて、頓狂なうさぎさんや太つちよの猫ちゃんは今日も元気かな。